

視覚障害の疑似障害体験実施の方法及び留意点（2） －手引きによる歩行の具体的なプログラム－

Procedures and important notices of simulations of visual disability (2) : Concrete program of the sighted guide

芝 田 裕 一*
SHIBATA Hirokazu

近年、障害理解の高まりから、社会啓発として、学校教育における授業や一般社会において視覚障害の疑似体験が数多く実施されている。本論文は、手引きによる視覚障害の疑似体験の詳細で具体的なプログラムを明らかにすることを目的とする。体験は、活動・参加における不便性・困難性だけでなく、不便性・困難性を克服できる可能性の理解である。体験の目的は、視覚遮蔽による歩行体験とそれによる自己観察（①視覚を遮蔽した状態での感覚・知覚、②心理的な不安感・恐怖感、③行動における困難性、④環境認知と地図的操作、⑤白杖等による単独歩行に対する可能性）及び視覚障害児・者に対する援助の一つである手引き方法の習得である。体験実施における留意事項には、アイマスクによる体験と視覚障害の相違点、手引きの条件と種類等、体験実施方法などがあり、体験は、体験者と手引き者の2人で1組で、一人がアイマスクをして体験者、もう一方が手引き者となり、一定時間後に交代することを基本として行われる。

目的、手引き方法などの事前解説後に体験が実施される。体験の基礎は、まずステップ1で、これは手引きの基本の形態と狭い所の通過を習得して遂行し、アイマスクによる不安感・恐怖感の低減が目的である。体験開始から20分～40分が経過し、体験者の多くに不安感・恐怖感の低減がみられ、目的で解説した自己観察を行うための心理的余裕が表れてきたらステップ2に移行する。基礎のステップ2は、視覚遮蔽による自身の感覚・知覚、環境認知、地図的操作の体験・気づきの自己観察とともに、それらから導かれる白杖等による単独歩行に対する可能性の理解が目的となる。ここでは、車音（音質）や屋外から屋内に入ったこと（エコー）などの聴覚、足底からの皮膚感覚、嗅覚などの自己観察とそれらから判断される環境認知、地図的操作などを体験する。次に、体験の応用に入り、手引きによる歩行を発展させ、溝等のまたぎ方、1段の段差の上り下り、階段の昇降などの方法の体験、習得を行う。最後に、事後の解説として、体験の目的など体験内容の確認や補足、体験者と手引き者の気づきについての解説と討議、関連する内容に関する講義を行い、体験の意義を深める。この疑似障害体験は障害理解の一助として実施されるが、この障害理解は、単に障害児・者を理解するということに止まらず、人間理解に繋がるものである。

キーワード：視覚障害、疑似障害体験、シミュレーション、手引き、プログラム

Key words : visual disability, simulation, sighted guide, program

序

筆者は、「視覚障害の疑似障害体験実施の方法及び留意点」の(1)において手引きによる歩行を中心とした疑似障害体験実施の総合的な方法及び留意点を論じており、そこでは以下の事柄を主要な留意事項として示している(芝田、2007a)。

①体験の目標は、障害児・者の生活における不便性・困難性というネガティブな側面よりも、その不便性・困難性を克服できる可能性があるというポジティブな側面の理解である。

②体験の目的は、視覚を遮蔽した状態で、感覚・知覚の状態、行動の困難性、環境認知、白杖等による単独歩行に対する可能性などを理解することである。

③体験の事前・事後指導として、疑似障害体験のあり

方、障害の理解、体験によって気づいた点などに関する講義や討議が実施される。

④実施に当たっては、不安感・恐怖感を低減させる時間をまず最初に確保することが不可欠で、体験者に「不安だった」「怖かった」という印象だけが強く残存することのないようにする。

近年、障害理解の高まりから、社会啓発として、学校教育における授業や一般社会において視覚障害の疑似体験が数多く実施されている。しかし、その目標・目的が十分に認識された上で実施されていると言い難い現状があり、そのため、当然ながら実施方法も不十分、不適切な状態となっていることが少なくない。そこで、「疑似障害体験」の(2)として、前述の留意事項を実施していくために手引きによる視覚障害の疑似体験の詳細で具体

的なプログラムを明らかにすることを目的とする。

1. 疑似障害体験の目標と目的

1) 目標

疑似障害体験は、ICF という活動・参加における不便性・困難性というネガティブな側面だけでなく、そのより大きな目標は、その不便性・困難性を克服できる可能性があるというポジティブな側面の理解である。この目標に基づいて体験のプログラムが構成される。

ところで、疑似障害体験というと障害者の心理的、情動的な理解、つまり「障害者の気持ち」の理解と捉えられがちであるが、後述する「アイマスクによる体験と視覚障害の相違点」でふれているように、それは、一過性の疑似障害体験で理解できるものではないため目標とはならない。

また、障害理解の一助としての疑似障害体験は、単に障害を体験するに止まらず、同時に、障害児・者への援助方法を理解する機会となるため、それも体験のプログラムに組み込まれる。視覚障害児・者の活動制限、換言すると活動能力の大きな柱は、歩行、コミュニケーション、日常生活動作の3つに大別されることから、以下が体験の具体的なプログラムとなる。

①手引きによる歩行などの歩行による体験

②点字の読み書きなどのコミュニケーションによる体験

③飲食などの日常生活動作による体験

なかでも、ここでとりあげる歩行による体験は、他の2つよりも視覚障害を多角的に体験できる意義深いものである。

2) 歩行による体験の目的

体験の目的は、視覚遮蔽による歩行を体験し、それによる自己観察、及び体験に基づく視覚障害児・者に対する援助の一つである手引き方法の習得に大別される。

(1) 歩行体験の目的

歩行体験の対象は、以下の5つについて体験をとおして自己観察し、視覚障害の理解の一助とすることが目的である。

①視覚を遮蔽した状態での感覚・知覚

視覚を遮蔽した状態での感覚・知覚が晴眼時とどのように相違して感じられるか。視覚以外の保有感覚では、聴覚、皮膚感覚（触覚）、嗅覚、運動感覚、平衡感覚が対象である（味覚や内臓感覚はここではあまり関係がない）。特に、俗に言われる五感に含まれていない運動感覚と平衡感覚は大切である。

②心理的な不安感・恐怖感

アイマスクをした当初より時間が経過するにつれて不安感・恐怖感はどう変化・低減するか、さらに、不安感・恐怖感が低減した後でも手引きを受けている時どのような状態で不安・恐怖が感じられるか。

③行動における困難性

手引きによる行動でどのような環境や状況が困難となるか。

④環境認知、地図的操作

感覚・知覚的情報等によってどのように環境認知ができ、地図的操作が行えるか。

⑤白杖等による単独歩行に対する可能性

白杖操作は特に実施する必要はないが、上記の環境認知や地図的操作を経験することで、これに、適切な白杖操作、援助依頼などが付加されれば、単独での歩行がどのように可能となるか。

(2) 手引き方法の習得

手引き歩行を体験することで、適宜、視覚障害児・者の手引きのあり方、手引きの方法等を習得することが目的となる。

2. 実施における留意事項

1) アイマスクによる体験と視覚障害の相違点（芝田、2007a、2007b）

アイマスクによる視覚の遮蔽は、実際の視覚障害とは相違している。以下はその相違点である。

①一般的に言って視覚経験のある環境下での体験である。そのため、視覚的イメージに影響を受けたり、それに左右されることがある。

②相当厚く重ねて目を遮蔽しても太陽光線による光の遮断は困難である。したがって、真の意味での全盲状態の経験は難しい。

③アイマスクをすることによって目の部分が覆われてしまい、顔面の皮膚感覚のすべてで熱や風を感じる経験が制限される。

④限定された時間内での体験であり、その障害での生活を余儀なくされる視覚障害者と比較した場合、心理的、情動的な意味で実際の障害とは異質のものである。

特に、体験者が体験前の視覚的な記憶や体験時の視覚的イメージを強く意識することは疑似障害体験にとってマイナスとなるため留意しておきたい。

2) 手引きの条件と種類等（芝田、2007b）

(1) 手引きの条件

手引きの条件は、①安全性・安心感の確保、②能率性の検討、③社会性の検討（見た目に自然な動きや容姿）、④個別性の検討（視覚障害者・手引き者の希望、行いやすい方法）の4つであり、安全性・安心感の確保を最上位とする。

(2) 手引きの種類

手引きの種類は以下の2つがあるが、ここではBの方法で実施する。なお、障害理解のための疑似障害体験、さらにガイドヘルパーや手引きボランティアなどの対象がAの方法と混同されやすいことは、特に注意が必要

である。

①Aの方法…歩行指導としての視覚障害者の手引き技術向上のための方法であり、手引き者による合図とそれに即応した行動を学習しようとするもの。

②Bの方法…介助としての手引きの方法で、B1の方法（手引きを知っている視覚障害者の手引きの方法、手引き者による合図とそれに即応した行動を理解している場合）とB2の方法（手引きを知らない視覚障害者の手引きの方法、手引き者による合図とそれに即応した行動の理解が不十分な場合）がある。

（３）手引きの留意点

手引きの留意点は、次の３つである。

①援助のあり方…援助はその障害者の希望に沿って行うというのが原則であり、あり方であるため、まず「話し合う」、「希望を尋ねる」ということが重要である。

②手引きのあり方…必要に応じてどのように手引きすればよいのか、その視覚障害者と話し合い、手引きの条件のもとに判断をする。

③総合的な判断力…手引き者には、常に確実に適切な判断力が要求されるが、その判断の基準となるのが手引きの条件である。

３）実施方法

①２人１組…体験者と手引き者の２人で１組となり、一人(M)がアイマスクをして体験者となり、もう一方(N)が手引き者となる。一定時間後にMとNは交代する。その間、指示があるまでアイマスクは外さないようにする。

②アイマスク…アイマスクをしている間は閉眼状態とする。その理由は、アイマスクに直接接することで角膜に対するなんらかの損傷を防ぐこと、より全盲状態（暗い状態）に近いものにすることの２点である。そのため、顔面の発汗への対応も含めてアイマスクと目との間に薄いタオルかハンカチを挿入しておくといよい。

４）その他の留意事項

①対象人数…指導者１名につき10～14組、体験者総数20～28名程度が妥当であろう。なお、疑似障害体験に習熟している指導者であれば、指導者１名で20～25組、40～50名程度の体験実施は可能である。

②対象年齢…疑似障害体験の目標と目的を確実に理解して体験に臨むことが大切であるため、対象となる年齢は小学校５年生以上、もしくは中学生以上が望ましい。障害理解は、疑似障害体験以外からも進められるため、時期的に尚早である小学校５年生より低い学年に対しては、講義や講話などが効果的である（芝田、2007a、2007b）。成長後に疑似障害体験の実施に関連する理解は十分可能となる。

③実施環境と歩行ルート…前もって体験に適した環境と歩行ルートを選択、設定しておく。

④実施時間…体験の基礎だけで60分程度が必要である。

⑤準備物…アイマスク、白杖（１組に１本）

３．事前の解説

１）目的等の解説

前述の体験の目的、アイマスクによる体験と視覚障害の相違点、手引きの条件と種類等、実施方法、などを解説する。

２）手引き方法の解説（芝田、2007b）

（１）基本の形態

疑似障害体験では、体験者は手引き者と並んで半歩程度、後ろに立ち、手引き者の肘の上を持つという基本の形態をまず解説し、加えてその他（以下）についても解説する。

①体験者の希望による手引きする側

②２人分の幅の確保

③適切な歩く速さ

④適切な説明と声かけ…方向を変える前、環境の変化、周囲の風景なども適宜含む。ただし、これは体験内容（環境や状況）によって説明や声かけを控えるよう指導者が指示する場合がある。これについては、後述の「疑似障害体験の実施１（基礎）ステップ２の留意点⑦」でふれる。

（２）狭い所の通過

道路を手引きによって歩行する場合、２人分の横幅が確保される必要のある基本の形態だけでは、安全性の確保ができない場合があるため、合わせて狭い所の通過の方法を解説する。

（３）留意点

①基本の形態と狭い所の通過は、パワーポイントなどのスライドあるいは動画を補助として解説すると効果的であるが、合わせて解説者か、あるいは体験者の中から代表者を選んでデモンストレーションをするとより効果的である。

②白杖を保持しての体験であれば、体験者が保持する方法を解説するが、基礎の段階では必ずしも白杖を保持しなければならないことはない。

③２人１組のペアをつくる。体験者総数が奇数の場合は３人１組のグループが１つできることになり、それへの対応が必要である。

④手引きの種類に関して(1)…体験は、援助が主体であるBの方法で実施するため、Aの方法である基本の形態のとり方（コンタクト）、手引きの腕の持ちかえ、手引き時の方向転換などは含まれる必要はない。

⑤手引きの種類に関して(2)…目的は体験であるので、アイマスクをしている体験者にAの方法である視覚障害児・者の手引き技術向上のための指導を実施する必要はない。それは、ガイドヘルパーや手引きボランティア、

さらに、教員、視覚障害児・者の家族などに対して専門的な手引き技術の習得が必要な手引き者養成が目的の場合であることに注意しておく必要がある。

⑥視覚障害者誘導用ブロックは、感覚・知覚の体験として踏んでみるのは大切であるが、手引き時に体験者があるの上を歩行するようにあえて誘導する必要はない。

4. 疑似障害体験の実施1（基礎）

1）ステップ1（アイマスクによる不安感・恐怖感の低減）

(1)目的

ステップ1の目的は、手引きの基本の形態と狭い所の通過を習得して遂行し、アイマスクによる不安感・恐怖感の低減である。

(2)体験開始前の演習的解説

体験開始前に、静止した状態で、基本の形態と狭い所の通過を1組ずつ演習的に実施し、その習得の確認と確実性を目指す。その時、まず体験者がアイマスクをしない状態での演習から始めてもよく、その後、アイマスクをして同様に演習を行う。



図1 体験者と手引き者の2人1組になって基本の形態での歩行



図2 狭い所の通過

(3)手引きによる歩行の体験

体験者と手引き者の2人1組になって基本の形態で歩行し（図1）、適宜、狭い所の通過を行う（図2）。

(4)留意点

①アイマスクによる不安感・恐怖感の低減のため次のような点に留意する。

i 段差などのないフラットな路面。

ii 道路では、走行車はあってもよいが、通行量は比較的少なく、静かな環境。

②これには、20分～40分が必要であるが、以下のような環境・状況ではより短時間で不安感・恐怖感の低減がみられやすい。なお、相対的に体験者の年齢が40歳代以上の場合が10～20歳代よりは不安感・恐怖感の低減に時間を必要とする。

i 環境：既知度が高いこと、車音が少ないこと、路面の凹凸などの変化が少ないこと。

ii 状況：歩行速度がゆっくりであること、知人・友人といった相対的に信頼できる手引き者であること。

③以上のような配慮によって、体験終了後、体験者から「怖かった、不安であった」という感想が出されないようにする。

2）ステップ2（感覚・知覚、環境認知、地図的操作の体験）

体験開始から20分～40分が経過し、体験者の多くに不安感・恐怖感の低減がみられ、目的で解説した自己観察を行うための心理的余裕が表れてきたらステップ2に移行する。

(1)目的

ステップ2の目的は、視覚遮蔽による自身の感覚・知覚、環境認知、地図的操作の体験・気づきの自己観察とともに、それらから導かれる白杖等による単独歩行に対する可能性の理解である。

(2)感覚・知覚

次のような環境、状況の体験と気づきを通して、その状態を自己観察する。それには、指導者からそれが何かを知らせる、体験者が自身で気づいて口頭で知らせる、体験者がその対象を指さすなどの方法がある。

A 聴覚

①音質の知覚…車音（自動車、バス、トラック、バイク、自転車、電車、路面電車など）、自動車ドアの開閉音、視覚障害者用音響信号音、踏み切り、ガード下、飛行機音、人声（話し声、笑い声など）、足音、空調機、工事、水音（溝、小川、噴水など）、犬や鳥の鳴き声、落ち葉を踏む音、木の葉が風でふれあう音、などの知覚。

②音源定位（音源には静止音源と移動音源がある）…遠方・近方の音源（車音、人声など）の位置、高い位置にある音源（高架の道路や線路の車音など）、近づく・遠ざかる音源（車音、話し声、足音など）、発進する車

音、飛行機音（飛行方向）、などの知覚。

③エコー知覚…屋外から屋内に入ったこと（図３）、屋外で屋根のある空間に入ったこと（図４）、路地に入ったこと（両側が背の高さ以上の壁や塀で道幅２～３ｍ程度の路地）、道路の片側の端に背の高さ以上の壁や塀



図３ エコー知覚（屋外から屋内に入る）



図４ エコー知覚（屋外で屋根のある空間に入る）



図５ 道路端の背の高さ以上の壁や塀（体験者が塀側に位置する方がより知覚しやすい）

が続くこと（体験者が塀側に位置する方がより知覚しやすい、図５）、などの知覚。

④白杖が触れたり、当たったりして発する音質（適宜、歩行を止めて差し障りのない物を白杖で触れてみたり、当ててみる）…電柱、ポール（交通標識、街頭など）、ポスト、自動販売機、並木、駐輪自転車、看板、などの知覚。

B 皮膚感覚

①足底での知覚…砂利、砂地、石だたみ、芝生、視覚障害者誘導用ブロック（点状ブロックと線状ブロック）、などの知覚。

②手指での知覚（適宜、歩行を止めて差し障りのない物を触ってみる）…電柱、ポール（交通標識、街頭など）、ポスト、自動販売機、木の葉、並木、駐輪自転車、などの知覚。

③顔面での知覚…太陽の熱、風、日向と日陰、などの知覚。

C その他

①運動感覚…上り坂と下り坂、傾斜（すりつけとよばれる歩道の車道へ向かっての下り傾斜、図６、道路両端の水勾配の左右への傾斜など）、右左折、道路面の凹凸（マンホール、道路の亀裂、溝ふたなど、図７、ただし、これは皮膚感覚とも関連する）、などの知覚。



図６ すりつけとよばれる歩道の車道へ向かっての下り傾斜

②嗅覚…コーヒー・カレー・ラーメンなど（飲食店）、鮮魚（魚屋）、草花（生花店）、石油（ガソリンスタンド）、排気ガス（自動車など）、たばこ（喫煙）、肥料（田畑）、などの知覚。

③平衡感覚…自身のバランスの知覚。

(3) 環境認知、地図的操作

感覚・知覚的な刺激から以下のような環境であることを判断し、認知する。

①聴覚…例として次のような認知がある。

i 左に走行車音を聞くことによって道路の右側を歩行している。



図7 道路面の凹凸(路上のマンホールや道路の亀裂に凹凸がある)

- ii 前方を左右に走る車音から交差点が近い。
- iii 車音が一齐に発進する音によって比較的大きな道路で信号が青に変わった。
- iv エコーを知覚したので屋内に入った。
- v 子どもの歓声や音の広がりから付近に公園あるいは学校がある。
- vi テニスなどのラケットでボールを打つ音からテニスコートがある。
- ② 皮膚感覚…砂道になったので一般道路からはずれたこと、太陽の光や温かさから自分が向いている方角（地図的操作）、などの認知。
- ③ 嗅覚…においから飲食店、鮮魚店、生花店、ガソリンスタンド、田畑、などの認知。
- ④ 運動感覚…北を向いて歩行して右折したことで東を向いている（地図的操作）、などの認知。

3) 留意点

- ① 実施環境…実施に際して、ステップ1、ステップ2に適した環境を選択する。
- ② 歩行ルート…実施に際して、ステップ1、ステップ2の実施に適した歩行ルートを設定する。前半の手引き者はその環境を見て視覚的に記憶することになるので、意義を高めるため体験者となる後半では歩行ルートを変更するとよい。したがって、歩行ルートは2種類用意する。
- ③ 実施時間…ステップ1は20～40分であるから、交代すると合計で40分～80分となる。ステップ2は、その環境（歩行ルート）に応じた実施となるためその時間は適宜である。
- ④ 体験者と手引き者は、ステップ1終了後に交代してもよいし、ステップ2まで進んでからの交代でもよい。
- ⑤ 体験者がアイマスクを外すとき、まぶしさを感じるので、ゆっくりアイマスクをはずすことを伝える、屋内ではずすといった配慮をする。

⑥ 基礎の体験で終了する場合は、その後、事後の解説（後述）を行う。

⑦ 体験者が感覚・知覚、環境認知、地図的操作について自身で気づけるように配慮する。すなわち、手引き者による説明の制限や指導者によるアドバイスを適宜実施する（前述の「事前の解説」の手引き方法の解説の項参照）。

⑧ 感覚・知覚、環境認知、地図的操作に関する体験や気づきに関係しない環境や状況では、手引き者に対して、体験者に右左折などの前にその行動を知らせたり、その環境や風景を説明したりするよう促してもよい。

5. 疑似障害体験の実施2（応用）

1) 目的

応用では、手引きによる歩行を発展させ、以下の環境での方法を体験、習得することが目的である。

2) 実施対象（芝田、2007b）

実施する対象は下記である。

- ① 溝等のまたぎ方
- ② 1段の段差の上り下り
- ③ 階段の昇降
- ④ ドア・引き戸の通過・開閉
- ⑤ 椅子への誘導
- ⑥ トイレの利用
- ⑦ エスカレーターの利用
- ⑧ 自動車の乗降

3) 実施方法と留意点

以下に基づいて体験と手引きの習得を行う。

- ① 疑似障害体験の実施1（基礎）で示した留意点は応用でも適用される。
- ② ここで示されている実施対象はメニュー的であるので、すべてを実施する必要はなく、適宜、選択して行う。
- ③ 階段の昇降は、体験者の不安感・恐怖感を考慮して溝等のまたぎ方や1段の段差の上り下りの体験後に実施する。
- ④ 対象の一つひとつについて、解説とデモンストレーションを実施する。
- ⑤ 時間的な余裕があれば他の参加者が観察する中で1組ずつ演習的に実施し、その習得を深める。
- ⑥ 適宜、雨の日の手引き、夏季の手引き、2人以上の手引きの方法、留意点を付加的に体験、習得する。
- ⑦ 電車やバスの利用を実施対象とするのもよいであろう。
- ⑧ ガイドヘルパー、手引きボランティア等の養成の手引き実習では、この応用レベルは2段階に分けてより詳細に進められる（芝田、2007a、2007b）。
- ⑨ 特別支援教育の教職員やリハビリテーション指導員・職員、視覚障害児・者の家族などに対しては、ガイドへ

ルパー等養成に準ずる内容での実施によってより専門的な手引き技術の習得が必要である（芝田、2007b、2010b）。

6. 事後の解説

体験の目的など体験内容の確認や補足、体験者と手引き者の気づきについての解説と討議、関連する内容に関する講義を行い、体験の意義を深める。

1) 歩行体験

(1) 視覚を遮蔽した状態での感覚・知覚

体験から得られる気づきには次のようなものがある。もちろん、これらは体験者によって相違する場合はある。

①人は視覚優位であるから、遮蔽した状態での視覚以外の感覚に対する感じ方や依存度は普段の開眼状態とは異質に感じられる。

②閉眼状態での視覚以外の感覚に対する信頼感は、当初は低い、徐々に高まってくる。

③視覚以外の感覚は体験以前に思っていた以上に有効である。

④車音の音質を聞き分けることでバスなどの大型車、乗用車、バイクは認識できるが、自転車は認識しづらい。

⑤運動感覚によって傾斜や右左折（ほぼ直角に曲がる場合）は、前もって告げられなくても認識できる。しかし、ゆるやかに道路が曲がっている場合は認識しづらい。

⑥道路面は意外に凹凸が多い。

⑦視覚障害者誘導用ブロックの点状ブロックと線状ブロックは、予期なく踏んだ場合その相違が認識しづらく、区別がつきにくい。

(2) 心理的な不安感・恐怖感

アイマスクをした当初より時間が経過するにつれて不安感・恐怖感は低減する。しかし、不安感・恐怖感の低減後、手引きによる歩行時、以下のようなちょっとした環境の変化であらたな不安・恐怖を多少感じる場合がある。

①急に屋内に入ったとき。

②傾斜を感じたとき。

③わずかな段差を踏んだとき。

④手引き者のミスで手引きされていない方の手や肩がなにかに触れたとき。

(3) 行動における困難性

手引き者と同じ方向を向くこと、狭い所の通過の合図の理解、既知環境であってもどこを歩いているのかの認知、などが分かりづらい時がある。

(4) 環境認知、地図的操作

感覚・知覚的情報等によって環境認知ができること、出発地での方向を意識していくことで進行方向が理解できること（地図的操作）などを確認する。また、環境や風景の説明を受けることでその地域の理解が進んだり、心理的に安心することも対象となる。

(5) 白杖等による単独歩行に対する可能性

視覚障害児・者は、白杖操作や盲導犬によって安全性を確保しながら、環境認知、地図的操作などによって単独歩行が可能となることに気づく。感覚・知覚によって認識できた事柄は、視覚障害児・者が単独歩行する際の目じるし（ランドマーク）や手がかり（クロー）となる（芝田、2007b、2010b）。

2) 手引き方法

手引きをされた状態に関する体験者の感想や気づき、及び手引きを行った手引き者の感想や気づきが対象となる。特に、視覚障害児・者を手引きする際、手引きの条件である安全性・安心感の確保や能率性などの検討はどのように進めるのが適しているかは大切なテーマである。

たとえば、前述の1) 歩行体験の(2)心理的な不安感・恐怖感で検討した「ちょっとした環境の変化であらたな不安・恐怖を多少感じる場合がある。」でのあらたな不安・恐怖を多少感じる環境の変化は、視覚障害児・者を手引きするときに配慮が必要となる対象といえる。

3) 視覚障害の理解、援助のあり方など

視覚障害の理解、援助のあり方などに関する解説と討議は、次のようなテーマが対象となる。

①疑似障害体験から気づき、そして理解した視覚障害という障害。

②視覚障害児・者の活動制限（ICF）の大きなものは移動（歩行）と情報（主に読み書き）であるが、移動における視覚障害児・者の能力的な可能性。

③視覚障害には困難な点もあるが、さまざまな多くの事物が視覚以外の感覚によって認識でき、それらによって歩行に必要な環境認知や地図的操作（この2つに歩行技術の習得と駆使、身体行動の制御、情報の利用の3つを加えたものが、歩行指導の対象となる歩行能力である）が行える可能性。

④視覚障害児・者の白杖や盲導犬による歩行指導（歩行訓練）の内容、方法、指導者（歩行訓練士）、及び歩行指導の現状。

⑤視覚障害者誘導用ブロックの有効性と限界、及び関連する援助のあり方。

⑥視覚障害児・者が白杖や盲導犬によって歩行中の援助の内容と方法などのあり方。

⑦視覚障害児・者の歩行に対する社会のマナーの現状とあり方。

⑧視覚障害児・者だけでなく、すべての障害児・者にとって、その立場を尊重し、そのQOLに貢献できる援助のあり方、援助における配慮事項。

⑨疑似障害体験から得た障害理解。総合して、健常児・者にとっての障害理解の意味と意義。

各テーマの詳細に関して、疑似障害体験では芝田（2007a）など、視覚障害・視覚障害児・者の歩行・視覚

障害者誘導用ブロック・援助では Carroll (1961)、芝田 (2005、2007b、2010b、2011) など、障害理解では真城 (2003)、徳田・水野 (2004)、芝田 (2010a) などが参考となる。

おわりに

筆者は、40年近く障害児・者の教育やリハビリテーションに関わる中で、これまでにガイドヘルパー、手引きボランティア、小学生から高校生までの児童生徒、専門学校から大学院までの学生、教員や施設職員など極めて多くの人たちに対する疑似障害体験の実施と指導を行ってきた。本研究は、それらの膨大な実践と経験に基づき、疑似障害体験の目的、内容、実施方法などについて改善・改変を繰り返すことで作成してきたプログラムを総合的にまとめたものである。視覚障害の疑似障害体験は、視覚障害に対する単なる興味、関心からではなく、視覚障害、視覚障害児・者、必要な援助に対する適切な理解を進めることを目的として実施されなければならない。したがって、安易にそして浮薄に疑似障害体験を実施することは、かえって視覚障害児・者や他の障害児・者に対する誤った理解を促すことになるため、一定の専門性の元に実施される必要があることの周知が求められる。

疑似障害体験は、このように障害理解の一助として実施されるものである。この障害理解は、単に障害児・者を理解するというに止まらず、人間理解に繋がる。すなわち、障害理解と同時に子ども、高齢者、外国人など社会的弱者とされる人たちに対する理解、及び DV、ネグレクト、いじめなどの社会問題に対する理解がなければ、障害児・者を適正に理解することにならず、それは広い意味で人間理解を意味するからである。

そして、さらに、総合的な人間理解は、人が自分自身の理解にも発展していくキーでもあるだろう。そこに必要となる人間的な心理には、他者への親切、情け、共感などがある。「情けは人のためならず」という言葉があるが、これが人間理解（障害理解）と自分理解の関係を端的に表現している。また、近年、この言葉が科学的に裏付けられるようになってきている (Hamilton, 2010)。つまり、この他者への親切、情け、共感によって生み出される脳内の伝達物質であるオキシトシンが QOL、つまり心身のウェル・ビーイングに大きく関わっているのである。

障害児・者による社会貢献は多大なものがあるが (芝田、2010a)、乙武 (1998) がいうように助け合いができる「血の通った」社会を再び構築しうる救世主にもなるのが障害児・者といえる。豊かな QOL を元にする人間理解と自分理解を基底とする障害理解に関する教育、及び社会啓発は、今後さらに向上・普及がみられるであろう。

文献

- Carroll, T. J. (1961) *Blindness: What it is, what it does and how to live with it*. Little, Brown and Company, Boston.
- Hamilton, D. (2010) *Why kindness is good for you*. Hay House UK Ltd., UK. デイビッド・ハミルトン著 有田秀穂監訳 (2011)「親切」は驚くほど体にいい！－“幸せ物質” オキシトシンで人生が変わる－. 飛鳥新社.
- 乙武洋匡 (1998) 五体不満足. 講談社.
- 真城知己 (2003)「障害理解教育」の授業を考える. 文理閣.
- 芝田裕一 (2005) 視覚障害児・者の歩行における援助のあり方と方法. 兵庫教育大学研究紀要, 26, 41-50.
- 芝田裕一 (2007a) 視覚障害の疑似障害体験実施の方法及び留意点－手引きによる歩行を中心として－. 兵庫教育大学研究紀要, 30, 25-30.
- 芝田裕一 (2007b) 視覚障害児・者の理解と支援. 北大路書房.
- 芝田裕一 (2010a) 障害理解教育及び社会啓発のための障害に関する考察. 兵庫教育大学研究紀要, 37, 25-34.
- 芝田裕一 (2010b) 視覚障害児・者の歩行指導－特別支援教育からリハビリテーションまで－. 北大路書房.
- 芝田裕一 (2011) 障害理解教育及び社会啓発のための障害に関する考察 (2)－視覚障害児・者の活動能力と活動制限－. 兵庫教育大学研究紀要, 39, 35-46.
- 徳田克己・水野智美編 (2004) 障害理解－心のバリアフリーの理論と実践－. 誠信書房.